

1

僕の友人はよく屋上から落ちる。

もうかれこれ二十回にはなるだろうか。授業中——僕は窓際の席なのだが——視界の隅を何かがよぎる。それで窓を開けてのぞいてみると、あいつが落ちている、というわけである。最初のころは大騒ぎになつて学校中の人都——生徒教師はじめ事務員警備員さんまでもが校庭に駆けつけた。すると、あいつは地面に大の字で突つ伏しているのだが、傷一つ負っていない。以前柔道をやつていたから無意識に受け身をとつてしまつているのだ。その受け身があまりにも見事なものだから、あいつの飛び降りはいつも失敗に終わる。そのうち誰も屋上からの落下物を気に留めなくなつた。あ、またやつてますね、つてなもんだ。

その日も窓からあいつが落ちてくるのが見えた。英語の時間だ。予習を完璧にしていて、授業を聞く必要もなかつたから、見るともなしに校庭のほうを眺めていた。すると、雲一つない青空を背景に、あいつが落ちてきたのである。人間の適応能力とは不思議なものだ。はじめて飛び降りがあつたとき、僕はそれを人間と認識できなかつた。何かおつきなものが見えたような……というひどく頼りない視覚情報

があつただけである。ところが今はどうだらう。落ちてくるのが人だとわかるどころか、服装髪型まではつきり認識できる。それが何の役に立つかはまだ判明していないが。

めんべくせえなと思ひながら席を立つ。当然ながらクラスの目が僕に集まる。

「どうした田嶋」

と、中年英語教師のかすれた声。「どうした田嶋」ってなんかすごい教師つぽいセリフだなあと思う。

「あ、岡崎くんがまたやつたみたいなので様子を見に」

「あんまり構いすぎると、あいつも調子に乗るぞ」

「世界中があいつを見捨てても僕だけは見捨てないって決めてるんですね」

「そうか、友情だな。わかつた」

先生の許可が出たところで教室を飛び出して校庭に向かう。校庭はあいつ以外誰もいなかつた。あいつを心配して駆けつけるのなんて僕か秋くらいのものだ。そして、残念ながら秋のいる教室からは校庭が見えない。

あいつ——岡崎明久は砂に汚れた足であぐらをかいていた。口をへの字に曲げて腕を組み、じつと空を見つめている。

「今日の受け身はどうだつた？」

「完璧。かすり傷もなかつた」

完璧だ、と繰り返して朋久は嘆息する。彼だつてもはや飛び降りで自分が死ねるとは考えていない。しかし、せめて痛みだけは感じたいのだろう。

「そいいえば数学のテスト勉強してくる？」

まずは雑談から入る。いきなり致命的^{クリティカル}な質問はなしだ。

「あんまりやつてない」

「大丈夫か？ お前、前も追試だつたろう」

「ベクトルは得意分野だ。いける」

「そういう」と言つてると足元^{元すくわれるぞ}すくわれるぞ

呼吸が落ち着いているのを見てとる。もう本題に入つてもいいだらう。

「で、今日はどうしたんだ。姉さんにエロ本でも見つかつたか？」

言いながら隣に腰かける。砂の地面は冷たくてお尻がびっくりする。こんなにびっくりさせてると便秘になりそうだ。

「いや、秋ちゃんのことなんだけど

秋ちゃん。秋。米原秋。僕たちの友人、そして朋久の彼女だ。

「秋がどうしたつて？ 一週間でもう倦怠期^{けんたいき}か？」

二週間前、彼が告白に成功したことを嬉々として報告してきた」とを思い出す。それは僕としても喜ばしいことであつたが、予想外ではなかつた。普段の彼らの様子を見ていれば「ああ、こいつらどうちも好きだな」というのは容易に読みとれるし、それなのに「人はいつも

でも探り探りの関係を続けていて、具体的には「あ、あの、一緒に帰らない？」、「え、いいの？」、「よくなかったら誘わないよ」、「じや、その、お願ひします」みたいなやりとりをしていて、微笑ましいと同時にどかしくもあり、なんであんなにわかりやすいのに早く付き合わないんだとかやきもきしていたりしていたので、「やつとかよ」という気持ちが強かつた。

交際を始めてからも一人はお互いの距離をつかみかねているようだつた。一人とも異性との交際は初めてじやないだろうになぜこうも初々しいのか。きっと恋とはいつだつて初々しいものなのだろう。お互いわからないなりに彼らは幸せそうだつたし、それを見ている僕だって幸せだつた。しかし、どうやらここでなにがしかの問題が発生しているらしい。

「本当にこれでよかつたのかなつて思つんだよ」

朋久はつぶやくように言つた。

「どういうこと？」

「秋ちゃんに告白して、付き合つて、それでいいのかなつて」

「え、お前、告白して一週間で飽きたのか？」

実際に付き合つてみて「あ、やっぱ違つたわ」となるケースはよく聞く。そういう」とかと問うたら、彼は強く否定した。

「そうじやないさ。秋ちゃんのことは大好きだし、世界一かわいいと思つてる」

僕の知る限り彼女はそこまで美人ではない。まあ、恋愛なんてそんなものだ。世界中の女性を知ってるわけでもないのに、「世界」なんて言つてしまつのが、実は「世界」という概念が「くぐり」狭いものだといふことを示している。

「じゃあ、なんでこれでいいのかなんて言い出すんだ。何が」「不満?」「不満はないよ。不満なんてあるはずない」

朋久の言つことはまったく要領を得ない。彼の中にある迷いがそうさせているのだろう。

「全然わからんぞ。ちゃんと説明してくれ」「あの方、恋つて基本的に自分の問題だよな」「自分の問題?」

「そう。相手のことを好きになつて、めちゃくちゃかわいいな、手つなぎたいなとか思つて、休日は何してるんだろうとか家族はどんな人なんだろうとか考えて、付き合つてゐるのを想像してにたつたり、うつかり相手の裸を想像しちやつていかんいかんとあわてて打ち消してそういう自分が嫌になつたり、でも相手の顔を見るとやっぱりうれしくなつたり」

秋の裸を想像している朋久とか想像したくないな。

「まあ、そういうこともあるよな」

「それってさ、全部自分の心の中の話だろ? 僕の心の中で勝手に繰り広げられてることだろ? それは相手には全然関係ないことなん

だ。俺が勝手に好きになつて、勝手にいろいろ盛り上がり上がるだけ。相手を好きだつて気持ちは自分のもので、自分だけの問題だ。その相手の問題じやない」

「そういうればそうだな」

「でも、告白したら、相手に気持ちを伝えちゃつたら、それはいいかないだろ? もうそれは俺の心の中だけの話じやない。本当は自分だけの問題のはずなのに、それを相手に背負わせて、こつちが勝手に好きなだけなのに相手はそういうの背負わなきやいけなくて、俺にはそうやつて背負わせちゃつた責任があつて、いや責任とも違つなううん、ああ、うまく言えないけど、とにかくそれでいいのかなつて」

言いたいことはわかつた。ようするに恋愛なんて全部自分のエゴなんじやないかつてことだ。本来なら自分の中だけで完結させなきやいけないものを相手に押しつけることになるのじやないかと心配してゐるのだ。ただ好きでいるだけなら相手は要らない。テレビの中の女優だつて、マンガの美少女だつて、なんだつたら消しゴムだつていい。でも、好きつて気持ちを相手に伝えて、一緒にいるのならそはいかない。相手には相手の人格つてものがある。そのことをちゃんと自分は考えてゐるのだろうか、ちゃんと考えてるとか言つても結局は自己満足に過ぎないんじやないだろ? か、とそういうことだろ? 「変にまじめだよなあ、お前は。誠実つていうか、誠実ぶろうとしてるつていうか」

そう、朋久は誰に対しても誠実であろうとする。自分が不実を犯すことを極端に恐れている。根本的に自分に自信がないのだ。自分のしている行動の正しさを確信できない。自分自身の思いやりや誠実の正しさを確信できない。だから悩む。悩んで飛び降りをして、受け身をとる。

「僕がうながすと、朋久は大儀そうに立ち上がりつて、尻の砂をはらう。」

「あと、彼女いないやつにこいついう悩み言うな。嫌味にしか聞こえん」「ごめん」

教室に戻る途中、携帯電話が着信を告げた。画面に「米原秋」の文字が表示されている。ちょうど前方にお手洗いがあつたので、中に入る。

覚なよりはづつといい。
皮の重さつ、手の重さつ、頭の重さつ。

彼の肩をつかんでこせんを向かせる。

「いいか、朋久。秋はお前に惚れてる。これはもう絶対の事実だ」「うん」

「だか」

し。お互いに相手の問題背負つて背負わせて。でなきや付き合つう意味
なんてないだろ」

「でも、

「だいたい問題背負うとかいちいち深刻に考えすぎだ。街を歩いてる高校生カツプルがそんなこと考えるもんか。秋に重いって思われるぞ気をつける」

朋久がうなずくのに躊躇^{ちゆうしょ}していると、終業のベルが鳴つた。英語で宿題が出たか誰かに聞いておかないと。

「さあ、戻ろう。早くしないとサッカーボードが来る」

二つ返事で通話を終える。詳しく話を聞く必要もないだろう。秋が僕に頼むことなんてろくでもないことに決まっているのだ。

ついでだからトイレで用を足してから二組の教室に行く。黒板の前で秋が腕を組んで待っていた。肩に少しかかるくらいの黒髪、顔の輪郭は丸っこく、太い眉が意志の強さを象徴している。足はパンチラなど恐るるに足らずとばかりに開かれている。かわいいセーラー服を着ているというのに、たたずまいは格闘技のチャンピオンだ。驚くべき

電話越しでもわかる少しハスキーナ声は不思議と人を安心させる響きがある。

「もしもし、源ちゃん？」

「わかつた

二つの返事で通話を終える。詳しく話を聞く必要もないだろう。秋が僕に頼むことなんてろくでもないことに決まっているのだ。

ついでだからトイレで用を足してから二組の教室に行く。黒板の前で秋が腕を組んで待っていた。肩に少しかかるくらいの黒髪、顔の輪

郭は丸っこく、太い眉が意志の強さを象徴している。足はパンチラなど恐るるに足らずとばかりに開かれている。かわいいセーラー服を着ているというのに、たたずまいは格闘技のチャンピオンだ。驚くべき

は「これが単に人を待つている姿」ということである。デートの待ち合われも「どうなのだろうか。」「で、どうしたんだ？」

近くの机に尻の半分を乗せる。地面ほどではないが、やはりひんやりする。

「ちよっと待つてね。もう一人来るから」「もう一人、ねえ」

「待つてて間に話したいんだけど、あのさ」

朋久の話をするつもりだ、と思った。声にわずかな照れの感情が混じっていたからだ。

「岡崎くんのことなんだけど」

やつぱり、こんなとき、彼女との付き合いの長さを実感する。

「朋久がどうした？ うまくいくつてないのか」

「全然そんなことないよ。毎日一緒に学校来て、一緒に帰つてるし。

」の前は映画観に行つたし

「のろけ話か。だつたら帰る」

「違う違う。あの私ね、岡崎くんのことが好きなの」

何を言つてゐるんだ、こいつは。

「彼女が朋久を恋慕している」となど、公然の事実だ。今さらそんな

恥じらいの表情を浮かべて宣言するようなことではない。

「岡崎くんのことが本当に好きで、だから毎日『大好き』って言つて

るの」

「けつこうなことだな」

『大好き』と言われたびに顔を赤らめる朋久の姿が浮かぶ。

「でも、毎日言つてゐるのに全然たりないんだ。私の好きつて気持ち、全然伝えられてない」

「そんなことないんじやないか。あいつだつてお前の気持ちわかつてるよ」

「そういうことじやないんだよ。毎日好きだつて言つてても好きだつて気持ちがどんどん湧いてきてあふれそうなの。もう今にも破裂しそうで。いくら好きだつて繰り返してもそれつてただの言葉で、この胸が張り裂けそうな感じとかドキドキとかそういうの全然表現できてなくて」

「やつぱりのろけか」

「違う！ 真剣に悩んでるの！ 私が岡崎くんに伝えたいのはね、この気持ちなんだよ。今ここにある、たしかに感じてる気持ちそのものなんだよ。でも、それつてどうやつたら伝わるのか全然わからなくて」

なんというか、なんというか。

朋久のほうも問題はあるが、こつちはこつちで問題だ。きっと彼女はまだ恋との付き合いに慣れていないのだ。自分の中から抑えても抑えてもあふれ出てくる感情、その飼いならし方を心得ていない。この熱量で迫られたら朋久のほうも不安になるつてものだよなあ。

そういう気持ちは一過性のものだから、と言つてもおそらく秋は納得しない。彼女は未来の話をしているのではない。今この瞬間の話をしているのだ。

「ねえ、どうすればいいかな？」

「うん、愛をたしかめる方法としては古来より互いの性器同士を……」

「サイティ！」

お腹を蹴られた。バランスを崩して机も一緒に転倒する。ここで拳でなく蹴りを選択するところが、容赦ない。

「ごめん。ついカツとなっちゃって」

そうやって弱気な顔を急に見せられると、こちらも許してやろうかという気になってしまふ。

「心配ない。僕が悪かったよ」

痛みに耐えて倒れた机を元に戻す。と、教室後方のドアにセーラー服が見えた。

「お待たせしました」

と、教室に入つてくるその子は、端的に言つてかわいかった。髪は男子と見紛うほど短く、それでもそのかわいさをいささかも減じてはいない。短髪が似合う女子は本物だ。ittたい何の本物なのかは知らないが。

その子が秋の隣にくると、余計にかわいさが引き立つように感じた。この子は四組の小川幸ちゃんおがわ さちです。こつちは六組の田嶋源ちゃんたじま げん

紹介するときにならん付けはやめろと言つてはいるのだが。彼女に言わせれば「だつて源ちゃんは『ちゃん』まで入れないと源ちゃんじやないじやん」だそうだ。しかし、この子は小川さんというのか。慎ましゃかでいい名前である。お互いに「よろしく」とあいさつを交わす。机を三つ適当に動かして円形に配置して座る。時計回りに僕、秋、小川さんの順だ。

「で、この集まりは何なの？」

「私が秋ちゃんに相談したんです」

小川さんが申し訳なさそうに言う。

「それがけつこうやつかいな問題で。だから源ちゃんに協力してもらおうと思って」

一方秋はまつたく悪びれた様子がない。僕にやつかいな問題を持つてくるのはこいつの得意技である。

「なるほどね。で、その相談内容はつとりといふのは？」

「はい、あの、日本史の服部先生はつべ先生つて知つてますか？」

「さつちやん、タメ口でいいよ」

余計なことを言うな、秋。小川さんが言い直す。

「えつと、服部先生知つてる？」

あ、でもこのぎ、ちないタメ口かわいいかもしれない。

「知らないな。僕、世界史だから」

「こういう人なんだけど」

小川さんは一枚の写真を机に出す。それは何かの新聞記事から切り取ったようで、白黒のペラペラだった。メガネをかけた蓬髪の男性のバストアップが写っている。絶妙に地味な顔だ、と思った。なんだか顔から伝わってくる自己主張というものが極端に薄い。いくらこの顔を目に焼き付けようとしてみても、ちゃんとインクをつけなかつたハンコみたいに薄れてしまう、そんな気がする。

撮かもしない。今度の男もメガネをかけているが、あごがつき出しているのが見てとれる。

「これ、服部先生に見える？」

「まさか。全然似ても似つかないじゃないか」

「まさか。全然似ても似つかないじゃないか」

「まさか。全然似ても似つかないじゃないか」

「まさか。全然似ても似つかないじゃないか」

「ある日、いつものように日本史の授業があつたの。でも、来たのは服部先生じやなかつた」

「で、その教師のふりしたあご男はつかまつたのか？」

「ううん、つかまらなかつた。それどころかみんな服部先生が入れ替わつてゐるのに気づかなかつた！」

「そんなバカな！」

「本当なの。授業が終わつてからまわりに聞いたの。『服部先生、いつもと違くない？』って。でもみんな『そうかなあ』とか『言われて

みれば違うかも』とかすごいあいまいで二つの写真を見比べる。写つてゐる顔は共通点を探せというほうが

難しい。この違いに気づかないなんて馬鹿げている。

「そうか！ 僕の頭を電流が駆け抜けた。

本物の服部教諭はすこぶる存在感の薄い顔をしていた。だから、誰、

小川さんがもう一枚写真を出してきた。

今度はカラーの写真で男の横顔が写つてゐる。アングルからして盗業をしてつた

「いや、でも今来たつて」

「服部先生は來た。でも、その服部先生は服部先生じやなかつたの」

「よく言つてることがわからない」

「待てよ、來なかつたんじやないの？」

「そう來なかつた」

「ううん、そうじやない。服部先生は休んでなかつた。教室に来て授業をしてつた」

「ううん、そうじやない。服部先生は休んでなかつた。教室に来て授業をしてつた」

「ううん、そうじやない。服部先生は休んでなかつた。教室に来て授業をしてつた」

「ううん、そうじやない。服部先生は休んでなかつた」

「ううん、そうじやない。服部先生は休んでなかつた」

「ううん、そうじやない。服部先生は休んでなかつた」

今度はカラーの写真で男の横顔が写つてゐる。アングルからして盗

も彼の顔など覚えていなかつたのだ。ゆえに別人が授業に来てもまったく何の違和感も抱くことがなかつた。通常ならありえない話だが、服部教諭のこの顔ならそういうことがあつても少しもおかしくない。

「で、その後服部先生は戻つてきたのか？」

小川さんは悲しげに首を横に振る。

「あの日からずっと本物の服部先生は見てない。授業に来るのはにせもので、職員室でもあのにせものが他の先生と楽しそうに話してた」

同僚たちでさえだまされてしまうのか。どれだけ存在感なかつたん

だ、服部。

「私、どうしても本物の服部先生がどうなつたのか気になつて。それでにせものを問い合わせたんです。でも、自分は本物の服部だの一点張りでどうにもならなくて」

「それで秋に相談したんだな」

ようやく話がつかめてきた。

今まで口を出さなかつた秋が言う。

「源ちゃん、私は本物の服部先生を探したいと思つてる。手伝つてくれる？」

「もちろん。協力する」

かわいい女の子のためなら努力は惜しまないのが僕の主義である。

「ありがとう」

小川さんの瞳は少しうるんでいるように見える。ここまで生徒に慕

つてもらえるとは、服部先生は教師冥利に尽きることだろう。

「源ちゃん、まずはどうしようか」

「そんなの決まつてるだろ」

まつさきに思いつく手段は一つだ。

「どうにか口割らせてみるしかないんじやない？ それにせあ、服

部野郎にさ」

2

職員室の扉が開く。息を止めて身構える。出てきた人物のあごをチエツクする。突き出ていない。ハズレ。

「国語の大森先生だね」

秋が出てきた人物の素性を教えてくれる。僕たち一人は職員室前の黒板で明日の時間割変更を確認しているふりをしている。部屋から例のにせ服部が出てくるのを待つてゐるのだ。今の時刻は五時三十分。教師の勤務時間は五時までだからそれ以後は残業ということになる。先刻からこうして待ち構えているのだが、一向に帰宅する気配がない。

「お前ら、どうしたんだ？」

背後で声がして肩が震えた。振り返ると今出てきた教師——大森先

生と言つたか——が怪訝けげんそうな様子で立つてゐる。

「黒板見てただけです、先生」

秋が用意していた言い訳をする。

「でも、さつきもいなかつたか、お前ら」

痛いところをつかれた。どうやらさつきも僕たちの姿を目撃され

いたらしい。通常、三十分以上黒板を眺めている人間などいない。

「あ、たまたまこの田嶋くんと会つて、話してんでたんです」

うまい切り抜け方だ。心中で秋に拍手を送る。

「そつか、そういうことか」

大森教諭も得心がいったようで、自分の頭をなでながらうか歩

き去つっていく。

「危なかつたな」

「こんなのピンチのうちに入らないよ」

頼もしい限りである。わかりやすい強さだけでなく、こうした

たかさをあわせもつてゐるのが秋の怖いところだ。

それからさらに三十分待つ。そろそろ帰りたいな、なんて思いながらあくびをしていると、扉が開く音がした。室内とろうかの境界線に黒い皮靴が現れる。視線を上方に移し、そのあごに意識を集中させる。あごが出てゐる。

「あいつに間違いないね」

秋が手元の写真と見比べる。にせ服部は僕たちのほうには来ないで、向かい側のろうかを歩いていく。気取られないよう十分な距離をとつてから尾行を開始する。

「あれがにせあご服部大先生か」

「あの、あんまりあごとか言うのやめない？ 本人氣にしてるかもしない」

「それもそうか」

たしかに相手の身体的特徴をあげつらうのは大人げなかつたかもしれない。これからは彼のあごに対する言及はなしにする。

にせ服部は存外背の高い男だつた。といつても胴長のためスタイルはあまりよくない。猫背で、やや右足に重心を傾けるような歩き方をしている。校舎から出ると、駐車場に向かわずに門を通りしていく。どうやら徒歩かバス、あるいは電車通勤らしい。こちらにしてみれば好都合である。気づかれないように、かつ離されないように注意しながら人通りが少ない場所に來るのを待つ。

月がにわかにその輝きを増してきたころ、彼が裏道に入った。ここらへんは民家も少ないから誰かにやりとりを聞かれる心配もない。僕たちは駆け足で彼に近づいていった。足音に気づいたのか、にせ服部がこちらを振り向く。

「きみたち……うちの生徒？」

「はい、二年六組の田嶋です」

とりあえずは無難に頭を下げて自己紹介する。最初から事をあらだ

てる必要はない。

「きみたち、こんなとこまでついてきてどうしたんだ」

まるで教師みたいな声色で言う。この男自身は教員免許を持つているのだろうか。持つていようが、正式な教員でないことは確実である。

「あなたは服部先生ですよね？」

「ああ、服部だが」

「実はあなたが別人に入れ替わっているっていううわさがありましてね」

「上目づかいに顔色をうかがう。

「本当なんですか？」

「入れ替わってるってどういうことだい？」

「あなたは本物の服部先生じやないってことです」

まるで表情が変わらないどころかびっくりともしない。心の中で舌打ちをする。

「そんなわけないだろう。私は正真正銘本物の服部だ」

「うそつかないでください」

秋が眉間にしわを寄せて言う。さつそく苛立ちがたまっているようだ。注意しないと。

「あなたが服部先生であるはずがない」

「何でそう言える？」

「友達がにせものだつて言つてました。私は彼女を信じます」

「では本物の私はどんなやつなんだ？」

そう言わると返答に窮するしかない。本物の服部先生を写真で

しか見たことがないからだ。しかもその写真の顔も影が薄くてつい忘却しそうになつてしまふ。つまり僕たちには「お前はにせものだ！」と強く主張できるような実感が薄い。

「妙な言いがかりをつけないでもらえるかな。私だつて疲れてるんだ」にせ服部はそうして先に進もうとする。次の瞬間、ドン！ という凄絶な音がする。見れば秋が壁に手を付けて、にせ服部を追いつめていた。

「あ、爆発したか。

「おいおいおいおいおい！」 黙つて聞いてりや何だ貴様！」

黙つてなかつたら、お前。

「妙な言いがかり？ 言いがかりじやねえよ、にせ教師！」

あんなに威勢のよかつたにせ服部は女子高生の啖呵たんかにすつかり委縮してしまつている。大人がおびえている姿というのはもの悲しい。

「本物の服部はどこだ？ 貴様は知つてるはずだよな、あご野郎！」

あごに触れないようとにと言つたのはどこどのあなたさんでしたつけ。

「お前みたいなかつは本物の居場所教えるくらいしか存在価値ねえんだよ！」

ちよつとそれは言いすぎではないだろうか。キレた秋をじめるのは不可能事だ。許せにせ服部。

しかし、にせ服部、おびえながらもなかなか口を割らない。意外に

芯の通つた男なのかもしれない。ならば恐喝は必ずしも最善の手段に

はならない。

彼の足元にバッグが落ちているのに気づく。壁に追いつめられたときに落としたのだろう。秋がドスをきかせている間にそれを拾つて中をあらためる。目的のものはすぐに見つかつた。

「服部先生」

あえてその名で彼を呼ぶと、僕はバッグからとつた携帯電話を見せた。

「申し訳ないですけど、勝手に中身見させていただきました。なんか電話帳に『服部さん』ってあるんですけど」

「おい、どういうことだコラ！」

秋はますますヒートアップする。

「お前が服部なら、なんでお前の携帯の電話帳に服部なんて名前があるんだよ！ やつぱりにせものじやねえか！」

「す、すみません」

消え入りそうな声で言う。まだ言い逃れは十分に可能なはずだが、彼女に凄まれていて冷静でいられるはずもない。むしろよくここまで耐えたものだ。

にせものは秋に任せて彼らに背を向け、「服部さん」の番号にかけてみる。呼び出し音が数回鳴り、男の声がする。

『もしもし』

「もしもし、服部先生ですね」

相手が緊張するのが電話越しにわかる。こいつがあの服部に違いない。そう思つて写真の顔と今の声を重ねあわせようとすると。

あれ？

『きみは？』

おかしい。ついさっき写真を見たはずなのに顔が思い出せない。その輪郭すらもまったく思い描けない。

『おい、聞いてる？ きみは？』

「あ、はい」

記憶力には自信がある。服部の異常な影の薄さを認識しながらも、自分だけは覚えていられるかもしれないという期待があつた。しかし、どうやら甘い考えだつたらしい。

「三年六組の田嶋と申します。以後お見知りおきを」

『何の要件だ？』

「あなたを探している生徒がいます。小川という子です」

『知らないな』

とぼけているようには聞こえなかつた。本当に知らないらしい。まあ、生徒の名前などいちいち覚えてられないのだろう。

「なぜいなくなつたんですか？ 小川はあなたのことをとても心配していますよ」

『俺を心配？ へえ。そんなことつてあるんだ』

服部は日本でパンダが発見されたニュースでも聞いたような声を

出す。

『いや、俺、昔から影薄くてさ。授業中に当たられたこととか一回もないんだよね。親からも忘れられる始末だし。そんな俺を心配ねえ。へえ』

『質問に答えていません。なぜいなくなつたんですか?』

『ああ、なんとなく仕事辞めて遊びたくなつて。まあ、入れ替わつて

もじうせ気づかれないし』

ひどく適當な理由だつた。そんなことで社会人が職務を投げ出してもいいのか。

「とにかく一度小川さんに会つてもらえますか? 本当に心配して

るんです」
『めんどういなあ。俺、自由でいたいんだよ。心配されるとかそういうのは勘弁してほしい』

僕が話しているのは本当に大の大人なのだろうか。その声色はわがままを言う子供そのものである。

「でも、ですね——」

「きやあああああ!」

背中で秋の悲鳴が聞こえる。気づかぬうちに彼女を複数人の男たちが取り囲んでいる。少し遠くに走つて逃げるにせ服部の姿が見えた。

「これは……」

『ああ、俺の友達が来たみたいだね。一応そのあごの人には俺の代わ

りやつてもらつてるし、助けないとと思つて』

友達? あのやくざみたいな風貌のやつらがか? というかやくざそのものじやないか。状況を把握しようとしているうちに僕もやつらに取り囲まれる。どうする? 考えている間にも男たちはにじり寄つてくる。逃げ場はなかつた。

『源ちゃん、戦える?』

「ああ」

秋が近づいてくる一人を殴つて、開戦ののろしを上げた。男たちが獣の叫びをあげる。携帯を投げ捨てて迎え撃つ。この人数とまともにやりあう気はない。うまく攻撃を避け同士討ちを狙う。一方、秋のほうはそんな計算はしない。正面から攻撃を受けて正面から殴り返す。すぐに鼻から流血する。帰つたら親は心配しないのだろうか。

「ちよつと待つた!」

上のほうからそんな声が聞こえてきた。殴りあつていたやつらが敵も味方もなく顔を上げる。

「じいだ?」「じいだ?」「じいだ?」

みんなが一丸となつて声の主を探す。その場にいる全員が一つになつていた。

「あそこだ!」

誰かが上を指さす。声の主は四階建くらいの建物の屋上に立つてい

「岡崎くん！」

秋が黄色い声を出す。それは他でもない朋久だった。

「俺も加勢するよ！」

彼は屋上から飛び降りて、見事な受け身をとる。いつ見てもきれいな着地だ。やくざたちはほかんとしている。世界にこんな受け身をとる人間がいるなんて想像もしていなかつたのだろう。

朋久がいれば百人力だ。もう負ける気がしない。気勢をそがれているやくざたちに向かって一気にたたみかける。僕は殴る、秋は蹴る、朋久は受け身をとる。男たちは何もできぬまま倒れていく。僕は裏拳を食らわす、秋は上段回し蹴りをぶつける、朋久は受け身をとる。何人かが逃げようとする。そうはさせるか。僕は飛びかかる、秋はバク宙から旋風脚を繰り出す、朋久は受け身をとる。

やがて男たちはちりぢりになつて逃げてしまった。

「助かったよ」

受け身をとつたままの朋久に駆け寄る。

「でも、何でここにいるんだ？」

「あ、いや、たまたま通りかかつて」

何かをこまかすように早口で言いながら起き上がる。

「それよりどうなつてるんだよ。説明してくれ」

僕と秋はこれまでのいききつを話す。朋久はいぶかしげな顔をしながらも頷いて聞く。

「本当にそんなふざけた教師がいるのかよ」

「残念ながら事実なんだ」

今まで教師とは理想を持った人種だと思っていた。僕たちを立派な大人にするために懸命になつて働いてくれている人格者だと思いこんでいた。しかし、そんなのは僕たちの勝手な幻想にすぎなかつたのだ。幻想が破れさつた今、言葉は何もない。重い沈黙が僕たちを包む。それを破つたのは秋だった。

「ま、今日のところは帰ろう。みんなよくがんばつたよ」

秋の笑顔はいつだつて周囲を救つてている。彼女はそのことをよく自覚していて、だから笑みを絶やさない。自分が誰かを救えるということを彼女は知つていて。

「あ、でも、その前にちょっと待つてね」

そう言うと、秋は何やら電話をかけ始めた。僕たちに聞かれないよう声を潜めている。

「誰と話してるんだろ」

「さあな」

朋久の問いに僕は肩をすくめて答える。秋の考えなんてわからない。

秋が電話を切ると、大量の足音が聞こえてきた。やがて大通りから大群の人たちがこちらに向けて行進していく。

「なんじやありや」

「私の友達」

「…ともなげに秋が言う。僕も朋久も^{あぜん}唖然とするしかない。

「何人いるんだよ」

「たぶん百人くらい」

百人も友達を集めて何をしようとするのか。手でもつなぐのか、手をつないで友達の輪でも作るのか。

行進がとまると、秋は指揮者みたいに腕を振り上げる。

「せーの」

「…………大好き!!」

百人の大合唱が大空に響き渡る。街中にもこだまはあるのだ、といふことを知る。朋久を見ると、口をぽかんと開けて閉口している。きっと僕も似たような顔をしているだろう。

「あれ、聞こえなかつた?」

その様子を彼女は、極度に僕たちの耳が遠いものと判断したらしい。

もう一度お友達の指揮をする。

「…………大好き!!」

そろそろ警察でも来るんじやないかとそれが気がかりだった。

「岡崎くん、聞こえた?」

「たぶん聞こえてる」

口のきけなくなつた朋久に代わり答える。

「秋、これはどういう意図のある行為なんだ?」

「源ちゃんには言つたよね。毎日毎日好きだつて言つても全然気持ち伝えきれてないって。だ、か、ら」

秋は固まつている朋久の手を取る。

「百人分の声だつたら届けられるかもと思つて」

アホか。つうかアホだ。

朋久はようやく状況を理解したのか、驚いた顔をして、それから顔を赤くして、うれしそうに頬をほころばせ、そして悲しげな顔をした。

「届いたかな、岡崎くん」

秋の問いかけに「届いた」と力なく答え、「でも」と続ける。

「こんなのが俺にはもつたいないよ」

「何で?」

「俺、秋ちゃんにこんなに好きになつてもらえるような人間じや、全然」

「そんなことないって」

強く握る秋の手を、朋久は振り払つて後ずさない。

「だつて秋ちゃんを好きだつていうのも全然きれいな気持ちなんかないやなくて。いろいろエロいこととか考えてるし、それに秋ちゃんが

源と一緒にいると嫉妬したりするし。いや、一人がそういうんじやないのはわかつてんんだけど、そういうのとはまた別で。なんかモヤモヤしたりして」

「もしかしてそれで僕と秋をつけていたのだろうか。

「秋ちゃんがいつもと違うことすると不安になつて。いつまでも変わらない今までいてほしいとか思つて。それつてすごい自分勝手で、わがままで。だから、俺、全然自分のことしか考えてないやつで」

「いつでも朋久は誠実を求める。自分の汚さを隠すことが許せない。その気持ちはある程度理解できる。度を越した愛情を与えることは罪悪感を生む。

「でも、それは。」

「好きだって言つてるじゃん」

「秋が険しい顔をして、声を絞り出すように言う。」

「でも、俺は」

「そういうの全部ひつくるめて好きだって言つてるじゃん！　どうしたらわかつてくれるの！？」

「秋は僕たちに背を向けて走り出してしまう。百人のお友達は所在なげに立つてている。朋久はまた固まつていた。

「おい、秋！」

「仕方がないので一人で彼女を追う。追いつくと、彼女はコンビニ前

の縁石に座りこんでいる。

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ」

「そんな大丈夫じやなさそな声で大丈夫だつて言うな」

「明らかに大丈夫っぽくない人に大丈夫かなつて聞かないで」

「悪い」

「こつち、そごめん」

「そんなやり取りをしたら彼女の顔からふつと笑みがこぼれる。何傷ついてるんだろうね、私」

「そりや生きてりやそんなこともあるんじやないか」

「ダメだよね、傷つけられたとか思つちや。傷つけられたんじやなくて私が勝手に傷ついただけだもん。自分が傷つくな、岡崎くんのせいにしちやダメだよね」

「いや、これはあいつも悪いと思うが」

「今になつても追いかけてこないのはちょっとひどいと思う。」

「ま、あいつも真剣なんだよ、お前のこと。だからいろいろ悩む」「わかつてる。岡崎くん、私のこと好きだもん」

「縁石から腰を上げて僕に向かい合う。

「聞いてもらつていい？　私の決意」

「十秒以内でな」

「私、もう岡崎くんのことで傷ついたりしない。自分の気持ちを岡崎

くんのせいにしたりしない」

「八秒だな」

「こいつは強い、と思う。とても強くて、でも案外もろいかと見せかけて、やっぱり圧倒的に強い。」

「じゃあ、戻ろうか。お前の恋人と百人の友達が待ってる」
彼らも相当困り果てているだろう。可及的速やかに戻つてやらねばならない。

「うん、戻ろう」

二人で元来た道を歩き出す。月が煌々と光っている。

3

それから僕たちは服部教諭について調べた。雇い主である校長に話を聞いて、彼が住んでいたアパート近隣の人にも聞きこみをする。しかし、彼らはほとんど服部のことを覚えていなかつた。どうにか親族にまでたどり着いたが、その親族にしたつてろくに服部のことを知らない。

「いや、そういうえばそんなやつもいた……ような気もしてくるかなあ」

これは服部の生物学上、そして戸籍上の父の言葉である。さすがに面食つた僕は手に入れた情報を疑つたが、たしかに彼は服部を成人まで育てた親だった。

僕たちは服部の影の薄さをなめていたのかもしれない。彼はほとんど

じ自分の痕跡を残さずに生きている。さながら透明人間のようだ。居場所を見つけ出すなんてとてもじやないが不可能に近い。

「服部は生きてて楽しいのかな」

「そう言つたのは秋である。

「だつて誰からも気にされないし、覚えてもらえないわけでしょ。そんな人生楽しいのかな」

「さあな。まあ、それはそれで楽しみがあるんじやないか」
僕にはそんな諂ひしかできない。あれほど影の薄い人生など想像が及ばない。ただ、あれはある意味、人間の理想の一つなんじやないかとは思う。

誰にも関わらずに生きていてたら。

それは誰しも一度は考えたことのあることなんじやないだらうか。人と関わるのは楽しいことでもあるけど、同時に煩わしくもある。自分を取り巻く人間関係から解放されたい。そう願う人は決して少なくないはずだ。

調査を続けて三週間たつたある日の放課後。教室で帰り支度をして

いると、クラスメイトの一人が息を切らせて走つてきた。

「どうしたんだ、そんなに急いで」

「大変なんだよ！」

その必死の形相に、何かただならぬ事態が起つてることを感じる。

じとる。

「何があったんだ」

「四組の小川が、日本史の先生を人質にして体育館に立てこもった！」

「なんだって！」

小川さんが日本史教師を人質にした。それはもちろんあのにせ服部のことだろう。なぜ？ 僕たちがいつまでも服部を見つけられないから強硬手段に出た？ とにかく現場に直行しなければならない。クラスマイトとともに体育館に走る。

体育館の入り口付近にはもう人だかりができていた。多くは生徒だが、中には困り果てた顔の教師もいる。朋久と秋もすでにきていた。

「状況はどうなっている？ 犯人は本当に小川さんなの？」

「ああ、何人も目撃者がいる」

朋久が答える。

「小川さんはどういうつもりなの？」

「こういうことみたい」

秋が携帯電話を見せる。どうやら動画サイトを開いているらしい。

再生画面には見覚えのある体育館内部が映っている。

「これって……」

画面右端から小川さんが出てくる。

『幅城町のみなさん、ここにちは』

カメラ目線で小川さんは朗々と言つ。

『今、体育館で人質とつてます。三時間したら殺そうと思ひます。人

質を助けたかつたらこの男性を見つけてください』

『服部の白黒写真が大写しになる。そういうえばこんな顔をしていたのだったか。いつ見ても影が薄い。』

『服部さんという方です。すごい印象に残りづらい顔で大変でしょうが、この動画を何回もリピートしながら街の中を探してみてください。』

『小川さんも何を考えているんだ。こんなことしたつて服部が見つかるわけ……』

『おい、写真の男見つけたぞ！』

『誰かが言った。』

『みなしげビルで似たやつを見たんだ！』

『見つかるのかよ』

『僕たちの三週間の苦労は何だったのか。人生の理不尽さを痛感する。』

『岡崎くんと源ちゃんはビルに行つて』

秋が提案する。

『お前はどうするんだ？』

『ちよつと人質になつてくる』

思わず耳を疑う。人質になる？

『何でお前が人質にならなきやいけないんだ。関係ないだろ』

『さつちやん今何でかすかわからない。私がついていたほうがいい

と思う

秋の言うことはもつともだつた。たしかに彼女がつていれば小川さんが思い余つて重大なことをしてしまるのは避けられるだろう。

「だから、二人は絶対に服部つかまえてきて」

覚悟がまつすぐに射抜くような瞳から伝わつてくる。ならば、僕も覚悟で応えなくてはいけない。

「わかった。行こう、朋久」

「ああ。秋ちゃん、危ないことはするなよ」

「わかってる。そつちも気をつけてね」

ビルは学校から北に一キロのところにある。急がなければ服部は他の場所に行つてしまふかもしれない。それがわかっているからどちらともなく走り出す。

「あれじゃない？」

途中で朋久が上方を指さした。みなしげビルの屋上だ。人が一人立つてしているのが確認できる。

「よし、行つてみよう」

ギアを上げて走駆する。ビルの中に突入、エレベーターを探すが見当たらない。階段しか通路がないようである。段差が広く、段数が多く。ぜえぜえぜえぜえ。このビルはたしか三十階建てだ。ぜえぜえぜ

えぜえ。僕の息切れと朋久の息切れが重なつて交響曲を奏でる。ぜえぜえぜえぜえ。

屋上に着いたころにはもう虫の息だつた。扉を開けた瞬間、二人同時に倒れこむ。

「大丈夫か」

屋上にいた人がハンカチを差し出してくれた。

「ありがとうございます！」

感謝して受け取ろうとする。どちらがそのハンカチを使うのか、朋久と争いになつた。結局僕が譲る形になる。使えたが今一度その人に感謝を述べる。

「ありがとうございました。あなたは？」

「服部です」

「服部さん。つてあの服部か？」

よく見ればたしかに服部教諭である。まったく気づかなかつた。あらためて彼の影の薄さがいかに恐ろしいか思い知る。

「初めましてですね、服部先生。以前お電話差し上げた田嶋です」「ああ、あのときの。俺に何の用？」

座つたままではかつこうがつかないので立ち上がる。朋久もあわてて立つ。

「今、あなたの影武者が人質にとられてる。あなたが行かないとあいためなかなか進まない。一段一段が僕たちの体力を着実に奪つていく。ぜえぜえぜえぜえ」

人、殺されるかもしれない。だから一緒に来てください」

「嫌だ」

にべもなく断られる。

「電話でも言つたよね？ 僕は自由でいたいの。誰にも縛られないで生きていきたいの。誰が死のうが関係ないよ」
ひょうひょうとした様子である。これが仮にも教育に携わる人間なんだろうか。

「ふざけるな！」

そう言おうと思った。しかし、僕が口にする前にそれは別の人間から発せられていた。

朋久である。

「関係ないわけないだろ。小川さんはあんたに会いたくてこんな事件起きてるんだぞ」
ひどい剣幕だ。ここまで怒っている彼を僕は見たことがない。

「関係ないよ」

なおも平気な様子で服部はうそぶく。

「俺が誰かに関係してたことなんて今まで一度たりともない」

「いや、ある！ 少なくとも小川さんはあんたを慕つてる。あんたが教師やめてどつかに行くのは自由だ。あんたの人生だしな。でも、先生なら自分の教えた生徒にさよならくらい言え！ あいさつはちゃんとしとしなさいって習わなかつたのか？」

額に青筋をうき立たせて服部につかみかかる。

「何をする？ 離せ！」

「離さない！ 今まで誰にも気にかけられなかつたあんたには想像つかないのかもしないけど！ 人間生きてるだけで誰かに影響与えて誰かに影響与えられてんの！ いい大人なんだからそういう自覚くらいちゃんと持てよ！ 自分が誰かに関係してると自覚！ 当たり前のことだぞ！」

朋久が話していた悩みを思い出す。

自分の問題を相手に背負わせてしまっていいのか。

自分が相手に影響を与えているという自覚。自分が相手を傷つけてしまうかもしれない可能性への配慮。自分が誰かの人生を動かすかもしれないという想像力。

服部にそれが欠けているのを、彼は怒っている。しかし、その怒りはたぶん服部には伝わらない。僕たちとはまるで違う世界を生きてきたこの男には。

「離せ！ 離せ！ 警察呼ぶ！」

「呼びたきや呼べ！ あんたがついてくるつていうまで離さないからな！」

服部は必死で抵抗する。二人は激しくもみ合う。助けに入ろうとした。

そのとき。

朋久の体が宙に投げ出された。柵を飛び越え、その姿が見えなくな

る。
えつ。

ああ。

もしかして落ちた……？

考える前に体が動き出していた。全速力で階段を下りていく。

おい、嘘だろ！このビル三十階だぞ！三十階の屋上から落ちたんだ

ぞ！いくらあいつの受け身だつてそんなの無理だ！あいつが死ぬ？

あいつが死ぬ？あいつが死ぬ！そんなのなしだろ！だってこれ服部

先生入れ替わり事件だぜ？影の薄い教師が周りにばれずに教師やめ

てバカنسしようつてそういう話だぜ？全然人が死ぬような話じや

ねえだろ！こんなくだらないことで人命が失われていいはずねえ！

お前だつてこんなくだらないことで死にたかないだろ！死んじやだ

めだよ！死ぬならもつと殺人とかテロとか深刻なことで死ね！そう

したら泣いてやる！泣き叫んでやる！こんなじや泣けねえよ！な

あ、僕ら友達だよな？友達なんだよな？だつたら泣かせてくれよ！お

前が死ぬときくらい泣かせてくれよ！僕、好きなんだよお前のこと！

バカみたいに好きなんだ！死ぬなんて許さない！許さないかんな！

ようやく一階まで下りてきた。外に倒れている、ひと、かげ。胸の

動悸が高まる。駆け寄ると、それはやはり朋久だった。

「おい、朋久！ 大丈夫か！」

体を振り動かすが、まるで反応がない。人形みたいに不動のままだ。

もう何も見たくなかった。何も聞きたくなかった。すべての感覚情報

世界は消えない。現実は消えてなくなつたりしない。うしろで服部が逃げていくのが聞こえるがもうどうでもいい。

朋久は死んだ。死んでしまった。

「何、悲壮な顔してるの？」

聞きなれた声が聞こえる。朋久だった。生きている。生きている？

「お前、何で生きてるの？」

「受け身をとつた」

言いながら上体を起こす。けが一つ見当たらない。

「でも、いくらお前の受け身だつて、三十階だぞ？」

「うん、俺もさすがにダメだと思った。でも、死ぬなつて思つたら秋ちゃんの顔が浮かんできてさ。そしたら今までにないくらいの最高の受け身がとれてた」

僕は嘆息した。それは安堵からだつたかもしれないし、あきれの感情からだつたかもしれない。そんなことで受け身のスキル上げてるんじゃないよ。

「源、俺つてさ、秋ちゃんのこと好きなんだな」

しみじみと彼は言った。バカじやねえのと思う。

「そんなのみんな知ってるよ」

「そうだ、そんなのは当たり前のことなのだ。彼は彼女のことが好きで、彼女は彼のことが好きで。本当はそれだけの、ごくごく単純な問題なのである。」

「それに気づいたんなら、もうすぐらん」ことで悩むな。ちゃんと秋と向き合え」

「努力する」

「このでそう答えるところがつくづくまじめだなと思う。でも、その前に服部つかまえないとな。時間がない」

「それなんだけど」

朋久は立ち上がりてほこりをはらう。

「源は先に体育館戻つてくれ。つかまえるのは俺がやる」

4

陽が沈み始めていた。

薄暗い道をひた走る。自分の足音だけがあたりに響く。あれからもう一時間がたつている。小川さんはどうなつただろうか。秋が人質ならめつたなことはないと思うが、やはり心配はつのる。腕の振りと足の回転率を上げる。心臓が脈打ち、全身に血液を送るのがわかる。急げ、僕。

前方に学校の明かりが見えてきた。体育館のまわりに人だかりがで

きている。夕方のときより多い。野次馬だろうか。よく目を凝らすと、人ごみは一層に分かれている。体育館をぐるつと取り囲む一群と、それを遠巻きに見る少数の集まりだ。後者に近づくとちようど同級生がいた。

「これはどうなつてるんだ」

「お、田嶋。なんかヤバいことになつてるんだよ」

「あそこに集まつてるのは?」

「わかんない。でもやくせっぽいぜ」

たしかに体育館を取り巻いている連中はどう見ても高校生ではない。武骨な体にガラの悪い服、刺青のある者もいる。とても教育の場に入つてこれらの人種とは思えない。

「おい、小娘! さつさと服部先生を解放しろ!」

そのうちの一人が怒鳴り声を上げる。他の者もがやがやと似たようなことを言つている。彼らの目的はどうやらあのにせ服部を解放させることらしい。

なるほど、あいつらは服部の手下だ。きつとそつに違いない。数の暴力をもつてして事態を收拾させる気なのだ。ざつとやつらを見回す。敵は何人だ? 五百人はいるだろうか。数えていると、やつらの間にざわめきが起つた。輪が大きく広がる。

「お前ら!」

聞き覚えのあるハスキーボイスが響き、あたりが静まり返る。秋が

中から出でてきたのだ。

「悪いけど、お前らみたいなのはお呼びじゃないんだ！ お帰り願おうか！」

挑発的な言葉にやくざ連中が色めき立つ。これだけの人数を刺激するのあまり得策とは言えない。秋にそんな計算はできないだろうが。

「もし力ずくでくるつていうなら私が相手になる！」

イツツソーケール。しかし、秋にだけかつこいいまねはさせられない。やくざの群れをかきわけて、輪の中心に向かう。男たちの人がいきれでむんむんとする中を進む。

中心には仁王立ちの秋がいた。いつものように堂々と腕を組んでいる。僕の姿に気づくと、一瞬きよとんとして、それから破顔した。

「お前はなんだ？」

やくざの一人が言う。

「あんたらに名乗る必要なんてないね」

目でやつらを煽り立てながら秋に近づき、背中合わせになる。朋久は秋の隣に立つ、僕は秋の背中に立つ、いつだつてそれが僕たちの関係だ。

「よう、元気だつたか？」

「源ちゃんこそ。服部は？」

「今、朋久がつかまえてるはずだ」

「ちゃんとつかまえてくるの？」

「問題なし」

さつき別れたばかりの朋久の様子を思い出す。「やる」と彼は言った。本気になつたあいつには理屈なんて意味をなさない。だから、丈夫だ。

「じゃあ、それまでに片づけちやわないとね」

「ざつと五百人はいるけど」

「問題なし」

正面のやくざたちがこちらに向かつてくる。秋が右の拳を握りしめている。

二十人が一気に吹つ飛んだ。

「バカな！」

スキンヘッドのやくざが叫ぶ。次の二十人が向かつてくる。秋が左足を軸に右足を振りあげる。バン！ その二十人も無残に倒れ散る。

「そんな……屈強な男たちを一瞬で……そんなことありえない」

スキンヘッドが呆然^{ぼうぜん}としている。高校生の前でこんな間抜け顔をさらして恥ずかしくないんだろうか。僕はそいつの服の襟をつかむ。

「おっさん、そんなこともわからないのか？」

そのほおげたを思いつき殴る。骨と骨がぶつかる気持ちのいい音がする。

秋を思つことで朋久は今までにない受け身をとつた。

「いいか、あんたら……」の女を傷つけられるのはこの世でたつた一人だけなんだよ！」

向かってくるザコを回し蹴りで一蹴する。

僕は朋久が起こした奇跡をしかと見た。

だつたら。

「そして、私は決めた！」

秋も手刀で三十人をつぶす。

誰かを思うことが人を強くするつて僕は知つてゐる。だつたら。

「もう絶対に彼のことで傷つかないつて！」

「そう、だから！」

あこの突き出たやつがいたから膝蹴りを食らわしてやる。奇跡つてのはいつでも必然だと僕は知つてゐる。だつたら。

「今こいつは！」

「今私は！」

腹に刺青のあるやつが突進してくる。

朋久が奇跡を起こしたのが必然だつて僕は知つてゐる。だつたら。

「無敵！」

そいつを一人でぶつとばす。

だつたら、これだつて必然だ。

自然と笑みがこぼれてきた。それはだんだんと顔中を支配して、やがて体中に広がっていく。僕の全身が笑つていて。笑い転げていた。顔が引きつるくらいに、全身が引きつるくらいに笑う。笑いながら敵を次々倒していく。

「ここには僕がいる。秋がいる。もうすぐ朋久も来る。やくざたちは吹つ飛ぶ。サングラスが飛ぶ、アクセサリーが飛ぶ、ハンカチが飛ぶ、カツラが飛ぶ。その中心で僕らが舞つてゐる。こんなに愉快なことが他にあるだらうか。

笑い疲れた僕たちは死屍累々の中にへたりこんだ。まわりで見ていた同級生たちが拍手を送つてゐる。「見せもんじやねえよ」と言おうとしたが、声が出なかつた。

暗がりの中を二つの影が歩いてくる。街灯に照らされたそのシルエットが誰のものか、僕たちはよく知つてゐる。

「悪い、遅くなつた」

そう言う朋久の横にはしょんぼりうなだれた服部がいた。さつきの威勢はどこかに霧消してしまつてゐる。蓬髪の乱れ具合も心なしかお

となしい。

「よくつかまえたな。どんな手使った？」

「ヒ・ミ・ツ」

いたずらっぽく笑つて服部を見る。すると、彼はふるつと怖おぞけ氣おぞけをふるつ。

「ところでこの倒れてる人たちは？」

「知らん。ホームレスたちが野宿でもしてるんじゃないか」

とぼけて答えると、納得したようではそれ以上は聞いてこない。僕もあまりしやべりたくないから訂正しない。

体育館の中から小川さんが出てきた。その目は焦点が合つていなくて、どこか宙を見ている。彼女の視線はいろいろなところをさまよつたあと、ある一点にくぎ付けになる。すなわち、誰よりも会いたいと願つていたその人に、である。

「服部先生」

つぶやくような声だ。僕は彼女が服部と会つたとき、涙するものだと思っていた。しかし、彼女の瞳は乾いていて、その疲れ切つた目で服部を見つめている。せつかく会えたというのに近づこうともしない。彼女はしばらくそうしていたあと、おもむろに頭を下げた。胴体と頭が直角の、きれいなお辞儀である。そして、「ありがとうございます」とか細い声で言つた。

服部はその様子を見てきよとんとしている。僕らもそうだった。あ

りがとう。その一言だけでいいのか。もつと話すべき」とがあるのではないのか。だが、頭を上げた彼女の表情を見て僕らは知る。一言だけで十分なのだ。あの一言を言うために彼女はずつと服部を探していたのだ。それはつまり、僕たちの戦いもこれで終わりだということを意味している。朋久と秋に目を向けてウインクする。一人ともウインクし返してくれる。

その後、清掃員のおばさんが転がつた五百人をきれいに片づけてくれた。野次馬のように見ていた同級生や小川さんも帰つていき、僕らは三人だけになる。

朋久がもじもじもじもじしているので背中を押す。

「おい、秋に言いたいことがあるんだろ」

「うん」

「じゃあ、さつさと言え」

僕に押されてバランスを崩した朋久はあやうく秋にぶつかりそうになる。それを秋が支えて、一人は見つめあうかつこうになつた。

「あの、秋ちゃん」

「何？」

「俺、気づいたことがある。俺、秋ちゃんのことが好きなんだ」

「知つてるよ、そんなの」

「俺も知つてたつもりだった。自分が秋ちゃんを好きだつて。でも違つたんだ。秋ちゃんのこと大好きだと思つてた。秋ちゃんのこと考えた」

ると心臓が止まるくらい好きだと思つてた。秋ちゃんのことしか見えないくらい好きだと思つてた。秋ちゃんのためなら何でもできるくらい好きだと思つてた。秋ちゃんのためなら死んでもいいつてくらい好きだと思つてた。秋ちゃんのためなら地獄の果てだつて行けるくらい好きだと思つてた。でも、

彼は自分の胸をがつしりとつかむ。

「こんなに」

胸をつかむ腕にいつそう力が入る。まるでそこにある何かをたしかめるように。

「こんなに好きだなんて思つてもみなかつたんだ。本当にさつき気づいたんだ。俺、こんなに、こんなに秋ちゃんのこと好きなんだつて」野暮なツツコミをしようかと思つたがやめる。彼が言つているのはたぶん今ここにある、その胸のあたりに漂つてゐる気持ちのことなのだ。

「私も好き」

うれしそうな顔で秋が言つう。

「言葉じや伝えきれないくらい岡崎くんのことが好き。伝えきれないくらいつていうが、伝えきれない。だつて百人で叫んでも全然足らないんだもん。一生かかっても無理かもね」

それは彼女の憂いだつたはずである。でも、今の彼女の表情はとても晴れやかだ。

「でも、その一生かかっても伝えきれない気持ちを、神様は私たちにくれたんだよ。毎日毎日少しづつ伝えていけるように。毎日毎日ずっと一緒にいられるように。運命つてそういうことだと思うんだ」

秋がそう言つて微笑むと、朋久が微笑み返す。手をつなぐでもない、抱き合うでもない。ただ笑い合う。そんな一瞬が彼らをつないでいる。世界で一番幸せな瞬間だよなと思つて、お前は世界中の幸せを見て回つたのかつて自分にツツコんで、やつぱ「世界」つて概念は狭いなあつて考えて、でもその狭さが愛すべきもののように思えて、だから僕はもう一度思う。

「これが世界で一番幸せな瞬間だ。

5

翌日、寝床でぬくぬくしていると、母が乱暴にかけぶとんをはぎとつた。

「いつまで寝てんの？」

「今日は一日」

きのうの乱闘のせいで全身筋肉痛だ。打撲や擦り傷も一つや二つではない。客観的に見て今の田嶋源に必要なのは十分な休息である。健全な男子高校生たる僕にとつて、じつとしているのは苦痛以外の何物でもないが、致し方……ッ！ 突然、足に鋭い痛みが走る。見れば、母がのすねを蹴つてゐる。痛い。

「こつてえよ！」

「学校行きなさい。誰があなたの授業料を払っているのかちゃんと認識していらっしゃるのかしら」

なぜ肉親に対しても冷酷な瞳を向けられるのか。

「学校？ 休みだよ」

小川さんが体育館に立てこもったとき、まつさきに期待したことがあつた。

これは明日の学校、休みになるんじゃないか？

だつてこんな重大な事件が起つたのだ。現場検証とか生徒の心情に配慮してとかそういう理由で翌日の授業は休みになるかも知れない。いや、なるに違ひない。そうでなければ誰が五百人のやくざ相手に大立ち回りなんて演じるものか。今日の休みが確約されているからこそ、きのうの僕はがんばれたのだ。

「でも、そんな連絡来てないよ」

「んなバカな」

起き上がりつて学校に電話してみる。事務員の声が聞こえてくる。

「あの、今日つて学校休みですよね？」

『いえ、通常通りあります』

信じられない答えが返つてくる。

「でも、きのうあんな事件があつたんですよ？」

『事件？ 何のことですか？』

「とぼけないでください。体育館の立てこもりです」

『私にはわかりかねます』

背筋を悪寒が走る。まさか、まさか、学校はあの事件を隠していくつもいるのか。五百人の負傷者が出ているというのに。そんなことが許されていいのだろうか。

『とにかく授業はありますので、いつも通り登校してください。あなた様の来校を心よりお待ちしております』

一方的に通話は切れてしまった。僕の表情を見て察したのだろう、母が勝利の笑みを浮かべている。

痛みをおして学校に行くと、いつも通りの教室があつた。予習や宿題をしているやつら、おしゃべりに興じているやつら、ゲームで盛り上がりつているやつら。どこを切りとつても、く平凡な日常の風景だ。聞き耳を立ててみても、きのうの事件について話題にしている人間は一人もいない。

僕は悟つた。学校は事件を隠していくとしているのではない。みんなの事件のことをよく覚えていないのだ。事件の中心には服部がいた。影の薄さでは人後に落ちることのないあの服部である。ならば、彼が関係する事件だつて影が薄くなるのは自明のことではないか。

やがてチャイムが鳴り、担任が教室に入つてくる。名簿を開いて朝の出欠を確認する。病気がちの山本が休んでいる以外はみんないる。いつも通りの一日が始まる。この筋肉痛も影が薄くならないだろうか、

と思う。

それからは特筆することもなかった。誰も服部について語らなかつたし、思い出もしなかつた。事件に積極的にかかわった僕たちでさえ例外ではなかつたが、ただ一度だけ、秋とこんな会話をした。

「そりいえば服部つてどうなつたんだろうな？」

「服部？」

秋はエスペラント語でも聞いたかのような顔をする。

「ほら、日本史教師の」

「ああ、服部ね」

「もしかして忘れてた？」

「まさか」

ブルドッグみたいに首を振る。完全に忘却の彼方だつたようだ。

「今、日本史は誰が教えるんだ？ 本人？ それともあー？」

「さあ、私は地理だし」

普通に考えたら、あんな事件の後に本物もにせものも働けないだろう。しかし、教員に欠員が出て困つたという話は寡聞にして知らない。いくら影が薄いといつても、教師が一人減れば何らかの不都合があるはずだ。では、代わりの人員が補充されたのか。でも、新しい教師が赴任したという情報もない。

「きつとどうにかなつてるんじやない」
秋が投げやりに言う。

「まあ、どうにかなつてるんだろうな」

僕もそこまで気になつてゐるわけではない。たぶん小川さんに聞けばわかるのだろうが、する気もない。きっと僕じやなく誰も気にしていない、気に留めない。それでこそその服部教諭だ。

「どうでさ、秋」

「何？」

「二人で一緒にいるのやめたほうがいいんじやないか？」

「どうして？」

「ほら、朋久が嫉妬するだろ」

「だつてやましいことないじやん」

それは秋の言うとおりだ。しかし、これはそういう問題ではない。

「それとも源ちゃん、私のことそういう風に思つてるの？」

「これだけ長く付き合つてきて、一度もそういうの考えたことないなんて都合のいいことは言わないさ」

「私はないけど」

それでは僕がいやらしいやつみたいじやないか。

「でも、相手の好意に甘えてばかりじやダメだろ」

「そもそもうなんだけどね。でも、今までいい。だつて」

そう言つて秋はいたずらっぽく笑う。

「岡崎くんが嫉妬してくれるの、けつこううれしいし」
ぶん殴りたいくらいかわいらしい笑顔だな、と思つた。

最後に一つの疑問を解消しておこう。

服部教諭がなぜ小川さんにあれほど慕っていたのかってことである。服部は影の薄い日本史教師でしかなかった。それなのになぜ？ というのは僕ら共通の疑問だった。その疑問はあるエピソードを開示することで氷解する。服部と小川さんの、とある放課後の物語だ。もちろんその場に僕は居合わせていなかつたから、本来なら語り手たりえない。しかし、もう最後だし、ちよつとのズルはご容赦願おう。今から僕は全能の語り手、見えない語り手、世界外存在としての語り手だ。

その日、小川さんは教室の隅で一人物思いに沈んでいた。クラスメイトから告白されたのだ。正直に言って全然タイプじゃないし、付き合つ気もない。しかし、どう断ればいいのか。こういう状況に陥つたことがないので皆目見当もつかない。窓から見える夕焼けがきれいでもそれに感動するような余裕を持たない自分が恨めしかつた。

そこにタイミングよく、というか間が悪くというか、件の服部教諭が入ってきた。最初、小川さんはそれが誰だかわからない。うつすら見たことがあるような……何の先生だつて？ どうしても誰か思い出せない。自分と何の接点もない他人と同じだ。だからこそ彼女は自分の悩みを漏らしてみる気になつたのかもしれない。

「先生、告白ってどう断つたらいいですかね？」

小川さんの言葉に服部はひどく驚いて——影の薄い自分が話しかけられるなんて思つていなかつたのだ——戸惑いながら言つた。

「ん？ 告白されたの？」

「まあ、はい」

「そんなの『ごめんなさい。付き合えません』でいいでしよう」

「その、どうやつたら相手をなるべく傷つけないように断れるかなつて」

「無理でしょ」

服部は小川さんの要望をバツサリと切り捨てる。

「きみに告白したそいつの望みわかる？」

小川さんは答えられない。

「きみを自分のものにすることだ。きつとそいつはきみが笑顔でいてくれたらとか抜かすけどそんなのうそうそ。世界で一人しかいないきみを自分の所有物にしたい、それだけだよ。その気持ちに応える気がない以上、きみはそいつを傷つけるしかない」

「でも、そんなの嫌です」

人を傷つけるなんて気分が悪い、と小川さんは思う。あつちが勝手に私のことを好きになつて、勝手に告白してきただけじやないか。それでなぜ私が気分を害さなきやいけないのだろう。

「嫌だね。理不尽だよなあ。理不尽だよ。告白されたことにきみは何

の責任もない。でも、告白されちゃった以上、きみは何も悪くないのに嫌な思いをしなきやいけない。人を傷つけなきやいけない。そりや理不尽だよなあ。でも、受け入れるしかないよね」

「じゃあ、私はどうすればいいんですか？」

「きみがそいつを傷つけるのは決定事項。だからちゃんと傷つける。中途半端な優しさなんて見せるな」

「ちゃんと傷つける……」

それは小川さんにしてみれば思いもよらない解答だった。でも、それは不思議と心の中にすっと入ってきた。ちゃんと傷つける。ちゃんと傷つける。

小川さんが押し黙ってしまったのを見て、服部は教室を出る。柄にもなくしゃべってしまった、と思う。よくあんな口から出まかせを言えたものだ。でも、明日になれば彼女は自分の顔も自分の言葉も忘れているだろう。自分は影の薄い男だから。

そんな予測とは裏腹に小川さんは服部の顔をはつきりと覚えている。その言葉も忘れずに大切にしている。

だからその日は、小川さんが初めて自覚的に誰かを傷つけた日だった。
カーナンフオール
終幕。